

仮設住宅の自立と課題解決に取り組む「元気玉プロジェクト」

「待つ人がいる」というやりがい

パルシステム生活協同組合連合会と会員生協、関連会社を含めたパルシステムグループ(以下、パルシステム)は、2011年12月21日から福島県会津若松市内の仮設住宅に商品を届ける「対面供給」に取り組んでいます。これは会津地域に避難している方々の自立と課題解決に取り組む「元気玉プロジェクト」に協力して行なっているもの。パルシステム福島郡山センターから生鮮食品や冷凍食品、日用品、ドライ品などをトラックに積み込み、毎週水曜日と木曜日の2日間、4カ所の仮設住宅を訪れています。

会津若松市内には、福島第一原子力発電所の事故によって町全域が「警戒区域」に指定された大熊町の方々が多数避難しています。仮設住宅は市内だけで10カ所以上ありますが、パルシステムは特に買い物が不便な地域を訪問しているのです。

2012年1月26日、パルシステムの職員14人が現地を訪れ、対面供給を行ないました。まずは朝9時に郡山駅に集合し、レンタカーでパルシステム福島郡山センターに向かいます。郡山センターでは「対面供給」全般を取りしきる丸山勇さん(元気玉プロジェクト)と亀山良さん(パルシステム福島)から、当日の行動予定および現地に入る際の注意事項が伝えられました。

さらに「対面供給」のパルシステム側の責任者である瀬戸大作さん(パルシステム生活協同組合連合会 事業本部 副本部長/事業開発部長)からは「高齢の方が多いので、自ら率先して荷物を持ってあげるなど、自分たちでいろいろと考えて動くように。また、慣れない土地でのくらしを強いられている方々のお話もよく聞いてください」という心構えに関する話がありました。そして、事前に準備されたコープ商品をトラックに積み込んで出発です。



おばあちゃんの荷物を戸口までお届けする、パルシステム神奈川ゆめコープの坂本崇さん。

商品を運ぶ車両は、パルシステムが復興支援の一環で被災地に寄贈した2tト

ラック4台のうちの1台です。パルシステムはそのほかにも軽自動車17台を寄贈しています。

現地に向かうトラックのなかで、「元気玉プロジェクト」の立ち上げから関わっている丸山さんに話を聞きました。丸山さんは、「対面供給」で供給する商品を決め、パルシステム福島に手配をするという役割を担っています。立ち上げ当初はどんな商品を持っていけばいいのかわからなかったそうですが、今はだいぶ慣れたといいます。「仮設住宅の方々は、毎週1回の訪問を楽しみにしているようです。待つ人がいるこの事業は、とてもやりがいがあります」と話してくれました。

亀山さんは「今は声を掛けなくても、時間になると皆さん出てきてくださいます。『また来週も来てね』と言われるので、頼りにされていることを実感しています」と「対面供給」が浸透しつつある現状を教えてくださいました。

毎週1回集まる貴重な「場」

郡山市から自動車でおよそ1時間強。雪に包まれた会津若松市に到着しました。まずは「長原仮設住宅」(約100世帯居住)で商品を下ろしたあと、「松長5号仮設住宅」(約20世帯居住)に向かいました。職員は仮設住宅ごとに二手に分かれ、会場となる仮設住宅の集会所で供給活動のセッティングと試食の準備に取り掛かります。

午後1時になると人々が集まってきました。集会所内は買い物をする人、試食をする人、来週の注文をする人の熱気に包まれました。

長原仮設住宅で買い物を終えて友だちと和やかにお茶を飲んでいたら新工トシ子さん(83歳)は「毎週来てくれるのを楽しみにしています。要望ですか? 強いて言えば手間をかけずに食べられる食材がもう少しあるといいですね」と話してくれました。

3歳になる息子さんを連れてきた高橋章江さんは、大熊町に住んでいたときパルシステムを利用しての組合員。「1月に、より放射線量の低い会津若松市に移ってきました。パルシステムの商品は無添加で安全なものが多いので、ここまで来てくれるのは本当に助かります」と話してくれました。

松長5号仮設住宅の集会所では、住民がコタツに入りながら四方山話をしていました。被災地支援活動に初めて参加した山崎勇介さん(パルシステム東京 三鷹センター)は「皆さん誘い合っていてらっしゃったようです。おばあちゃんたちの笑顔を見ると、この活動を頑張って続けていく意義があると思いました」と言います。

パルシステムの商品を試食しながらお茶を飲んで談笑している人々の姿からは、「対面供給」がコミュニケーションの場になっていることがよくわかりました。

瀬戸さんは「最初は肩に力が入ってしまっていたのですが、毎週通うごとに分かってきました。私たちは週に1回人が集う『場』をつくっているんですね。大がかりなイベントを単発的に行なうことも大切ですが、協同組合らしく『細く長く』続けることも必要なのではないでしょうか。それに、試食をしながら楽しく時間を過ごすのは昔の共同購入のスタイル、いわば生協の原点です。自分たちの仕事の意義を振り返るためにも、1人でも多くの職員に参加してもらいたいですね」と話しています。

つい最近までこの仮設住宅に来ていた野菜売りのトラックが、急に来なくなりました。利益がさほどではなかったのですが、困るのはトラックの野菜を当てにしていた人々



長原仮設住宅で行なわれた対面供給販売の様子。

です。瀬戸さんがおっしゃる「細く長く」は、故郷に戻りたくても戻れない人々の暮らしを支えるために、きわめて重要な考え方なのです。

「いずれは自治会も巻き込んだ自主組織にできればと考えています。また、職員が学ぶ貴重な『場』としても続けていきたい」と話す瀬戸さん。定時職員の参加を予定している会員生協もあるそうです。パルシステムは「対面供給」を息の長い活動として取り組む方針です。